

「世羅教育」の継承と淘汰

渡邊規矩郎¹ 時永 益徳² 岡本 和信³

奈良学園大学・日本教育新聞社¹ 広島県世羅町教育委員会² 広島県東部教育事務所³

広島県中東部の世羅台地、この地の「世羅教育」には一世を風靡した時代があった。斎藤喜博（群馬県出身の小学校長、大学教授）も、吉本均（広島大学教授）も世羅を研究フィールドにした。世羅の教育風土・気風が2人の研究者を呼び込み、「世羅教育」に大きなインパクトをもたらした。「世羅教育」の原点は授業研究。世羅では、「授業で子どもを変えよう」「授業こそ子どもを変える教育手段である」という教育理念が根付いていた。その流れの中に、小学校教育には、教材解釈と表現の教育としての斎藤喜博の教えが入り、中学校教育には、学びの主体を育てる学習集団づくりに代表される吉本均の教えが入った。2人の指導を通し、「世羅教育」はステップアップした。その後、世羅町にも少子化の波は押し寄せ、平成23年4月には小学校を統合・再編し10校が4校になった。世羅町では、望ましい学習集団をつくり、切磋琢磨のできる学級をつくることをねらいに、地域も保護者も、脈々と続く「世羅教育」を継承しつつ、現在はアクションリサーチ型の授業研究を進めている。その「世羅教育の継承と淘汰」の取り組みを、時永益徳教育長らに聞いた。

【キーワード】 斎藤喜博 吉本均 授業研究 教育方法 学習集団づくり アクションリサーチ

I はじめに—研究の概要

1. 教育実践の改革をめざす流れと教育主張

本稿は筆者（渡邊）の研究「学校現場からの教育改革：想起データ分析」の一環である。

教育のあり方を変革し新しい方向づけをめざす学習理論と実践は少なくない。特に近年、「教育爆発時代」といわれた1970年代から1980年代にかけては、さまざまな学習理論が出現し、それに呼応する実践が試みられた。これらは教育研究集団を形成して教育実践研究を繰り広げ、時の流れの中で消長があるものの、現在の教育実践にも大きな影響を及ぼしている。その代表的なものを取り上げ、その問題意識と提唱されている改革策の概要を検討することにより、今日の学校教育、教育全般の問題点の克服をめざすことができると考える。

独特の教育実践研究を積み上げた教育研究集団は閉鎖集団になりがちであるが、それぞれが持つ学習理論や研究成果を、共通の広い土俵の上上げて比較検討し、それぞれが示唆するところをわが国の教育界の共通財産としていくことが必要である。現在の学校教育のあり方の何が問題であり、どのような方向へ解決しうるかについて、それぞれの学習理論や実践あるいは教育集団の取り組みが示唆するのは大きいはずである。それらを分析、その成果をもとに、現代における教育改革の課題を明らかにし、改革への具体的な提案を行うことを本研究ではめざしている。

筆者は、1966年以来、教育ジャーナリストとして、

教育界に眼を注ぎ、教師教育、教員の資質向上、教育研究のあり方に関心を寄せてきた。特に1970年代から1980年代は、第一線の教育記者として、本研究で聞き取り調査を行う研究者、実践者に直接・間接に接した体験を持つ。従って本研究は、研究者自身の戦後教育実践研究史の追体験、振り返りでもある。先達の学校改革への夢と志を研究し、後に続く現場の実践者にこの「戦後日本の教育遺産」を継承してもらいたいと考える。

教育界においては、絶え間なく、教育の本来のあり方を問い直し、現実の学校教育をどのように改革すればそれに近づけることができるか、ということについての学習理論や試みが続けられてきた。

戦後は、戦前・戦中の教育を全否定、当時のアメリカの教育思潮の影響の下に、いわゆる「戦後新教育」が展開された。そして、1970年代から1980年代の「教育爆発時代」にさまざまな学習理論が出現し、それに呼応する実践が試みられていった。しかしその後、教育界では、国の大きな教育改革の流れはあるものの、学校をベースにした学習理論や実践的試みは低調になっている。

2. 学校改革の先達の想起データ発表の意義

教育実践の改革をめざす流れについて、梶田毅一は、1970年代の「現代教育主張の総点検」を行っている（『総合教育技術』小学館 1978年4月～1979年3月）。梶田は、明治以来の教育主張の歴史的展開と現代における教育主張の全体状況を概観したあと、

「学び方学習」「極地方式」「範例学習」「発見学習」「仮説実験授業」「主体的学習」「バズ学習」「集団学習」「完全習得学習」「教育工学」を取り上げ、それぞれの教育主張とその実際を検討している。本研究では、梶田の研究成果をさらに発展させたいと考え、さしあたり、1970年代から80年代にかけて出現した学習理論の提唱者と学校現場における実践者の双方の代表的人物に聞き取り調査を行う。

学校改革の先達の具体的な提案を含む主張は、学校現場が閉塞状況にあり、教育研究が低調になっている昨今にあつて、学校教育にのみとどまらず、教育全般の改革にむけての課題を提起し、示唆を与えてくれる。

学校改革の研究者と実践者の想起データは、一定の聞き取り調査後において分析し、学校改革に関する課題や具体的な改善への方法論を明らかにしていく予定であり、本研究の意義は「学校現場からの教育改革：想起データ分析（1）ブルーム理論と梶田叡一」（奈良学園大学紀要第2集 2015, 3. 10）で記した通りである。

近年、学校教育を基盤にした学習理論や実践的試みは低調になっている。学校現場では、ハウツーを求め、場あたりの指導に終始しているくらいがある。本研究が学校をベースにしたカリキュラム開発に向けた授業研究、実践研究の興隆に資することになれば、これからの新たな学校文化、教育文化の創造に寄与できると考える。

学校改革の実践者のナマの声は、それ自身が今後、学校改革の歴史及びそれを牽引した先達を研究していく上の素材を提供することになろう。

Ⅱ 世羅教育について：時永益徳教育長らに聞く

世羅教育について聞き取りは、2014（平成26）年11月10日、世羅町の学校を視察したあと、世羅町教育委員会の教育長室で、時永益徳教育長に対して行い、広島県東部教育事務所の岡本和信学校経営相談員が同席した。インタビューは渡邊規矩郎が務めた。

1. 斎藤喜博、吉本均の研究フィールド

渡邊 世羅の教育につきまして、いろいろと勉強させていただきたいと思います。

先ほどからお話いただいていたことですが、斎藤喜博さん、吉本均さんが世羅でやられたことの「継承」と「淘汰」というお話、それから先ほどから時々話題に出っていますが、「精神性」というものを世羅の教育に培われたのは、時永教育長さんの校長時代ぐ

らいではないかと考えるのですが、そのあたりのこと、さらに教育長のお話に出てくる「高み」という言葉、それらを追求している教育は、全国を見渡しても数少ないと思うのです。そのあたりのことを、世羅の教育の変遷も含めてお話しいただきたいと思っています。

時永 話の展開によっては、岡本さん（東部教育事務所学校経営相談員）が、世羅の教育について外から見てくれているので、私よりもシビアに評価し結構言い当てていると思うので、岡本さんからいくらか聞いていただければと思います。

私は、「世羅教育」の原点は授業研究だと思っています。世羅教育の歴史の中に斎藤喜博先生（宮城教育大学教授）、吉本均先生（広島大学教授）が登場されますが、やはり何もなかったところに斎藤喜博さんが現れたり、吉本均さんが現れたりするのではないのですよね。先輩に当たる先人の話を聞いてみても、ここには（この世羅には）、「授業で子どもを変えよう」という考え方があり、「授業こそが子どもを変える教育手段なのだ」という思想性が古くから根付いていたと思います。その考え方（思想性）がある中で、小学校教育においては斎藤喜博さんの登場になってくるし、中学校教育においては学習集団づくりにて代表される吉本均さんの登場になってきたというふうに思っています。

お二人の登場によって「世羅教育」はステップアップするわけです。一世を風靡したというのは言い過ぎかもしれませんが、教育の世羅ブランドをつくったと評価しています。お二人を核にして、先人の世羅の教育者が築いたものであると思っています。

けれどもその斎藤理論や吉本理論も、教育実践に移していく中では率直に言って課題も見えてきました。それは決して理論をけなすものではありませんが、理論の素晴らしさがある反面、教育実践の中では課題も見えてきたというところですね。理論を実践として展開する中で、これは実態にあわないと思えるものもあるし、時代の変化の中で、指導理念が形骸化していった面もあり、それが淘汰されたということになります。

斎藤理論にしても吉本理論にしても、授業論としてすごく大きなものがあり、今の時代にも継承すべき理念もあり、それらを書き物なり論文なりの形で残し継続していきたいとは思いますが、できていない悔しさもあります。現在、教育長としては、これまでの「世羅教育」を継承する言語として、「品格」という言葉を使い、品格という言葉に象徴される精神性に世羅教育の目指す姿を重ねています。まさに、

品格のある教師により、品格のある教育がなされ、その結果として品格のある子どもたちが育っていくという、教育行政を担うものとして、そのようなサイクルが循環する学校教育を創造したいと思うのです。これはまた、日本古来から（次世代を育てる）人々に連綿と伝わってきた精神性でしょうね。

（一つの例として）斎藤喜博さんの話は、先ほど世羅小学校へ訪問していただいたときにかなり出ていましたので、ここでは吉本均さんの話をさせてもらいます。

彼が広島大学を中心に「教育方法学」を立ち上げられましたが、まさに、日本の教育界に一石を投げられたというか、一つの金字塔を建てられたと思っています。その先生がこの世羅を教育方法学の研究フィールドにしていたいただいたということは、世羅としては誇りに思えることです。その学習集団づくりが現在の世羅にそのまま継承されてはいませんが、あの時代、試行錯誤しながら整理された授業づくりの論理性さらには指導方法等は、私は未だもって捨て難いものがあると思っています。今日の学校訪問の中でも話が出ていましたが、方法論だけが一人歩きし、方法論だけが継承されていったら、必ず形骸化します。その指導方法の中にどのようなねらいがあるのか、なぜそのような方法で指導するのかといった教育理念がないと形骸化するのですね。学級の中に班をつくり、班長をつくって話し合いをさせれば、生徒の学習が主体的になるかといえ、そんなことではないですよ。

かつて吉本教室と学校現場が、一方は論理形成でもう一方は具体的実践で、相互作用的にお互いが高まっていったという事実はあるわけで、「子どもをどのようにして学習の主体に育てるか」という命題のもとに議論が展開されていました。当時、「子どもはまだやらされ感である」とか、「荒れる子どもの荒れない側面をみよう」とかの言葉がよく飛び交っていました。子どもの実態をしっかり見定めて、良さを引き出す営みこそ教育なのだという当時の教育理念は、今もって教育の大切な考え方であると思います。しかし、理念（精神性）が失われていく中で、方法論だけが残ってしまいました。そのころから、学習集団づくりといっても所詮こんなものかという形だけが残ってしまった。これが形骸化の中身です。

現在、学習集団づくりという教育用語は世羅の学校現場から消えています。授業を活性化したり、思考の幅やものの見方を広げたりするために、ペア学習であるとかグループ討議であるとか、さらにはグループワークとかの形で、授業の中で小集団活動

を活用する方法は継承されています。私の目からは、これはかつての学習集団づくりの中で生み出された指導方法だなあと考えることに合うことがあります。斎藤喜博さんに代表される国語の授業研究や表現活動の指導法の研究と同様に、吉本均さんに代表される学習集団づくりの実践研究も突き詰めれば授業研究です。要は、子ども一人一人を主体的な学習者として育てるための指導方法を求めているのですね。

渡邊 ごく当たり前の教育ということですね。

2. 現在は「品格のある教育」を推進

時永 道徳教育の教科化とか、活用・協働型の学力とかの話題が、今教育界で飛び交っていますが、知の教育も大切です、徳の教育も大切です。体力づくりも大切です。そういうものを内包する形で、現在世羅では「品格のある教育」を進めています。11月1日を「せら教育の日」として定め、学校文化発表会を行っています。世羅教育の中で、品格のある子どもを育てたい。そのために、各学校に望ましい精神性を育む学校文化をつくりたいと思っています。

岡本さん、何か言ってみてください。

岡本 私は因島の出身ですが、初任者のころから世羅西中や大田小の教育を見せていただいて圧倒された者です。どうしてこういう教育が世羅に展開されるのかというのが不思議で、結局、壮大なそれを支える文化があるとか、古くから文人が育つというか、豊かさゆえに教養も身につけているような、そういう台地なのかなあと思いながら、少し懂れていたのです。

尾道教育事務所、今は東部教育事務所ですが、そこで時永先生と出合いました。時永さんが非常に豊かに世羅教育を語られ、私は大きな影響を受けながら一緒に仕事をしていました。時永さんはその後もいろいろなところで活躍をされるのですが、若くして県の教育奨励賞をもらっておられます。若い時からちょっと違うんですね。

先ほどの中学校の訪問で、科学研究のことが出ていましたが、私も理科の教員として中学生の科学研究を指導していたのですが、とても時永さんには追いつかないんですよ。我々理科仲間には、「時永さんの理科、科学研究を追い越せ」という合言葉がありました…。

最近のことで言えば、世羅の8つの小学校を2校にした。その学校統合は反対もいっぱいあり、普通なら大変なことになると思うことを、教育理念の

ところで地域や保護者とつながるものがあるのでしょうか、統合により質の高い学校を創ろうという風を起こしながら、最終的には2校にされた。これは大成功だったと思います。

さらにもう一つは、生徒指導面で荒れていた小学校や中学校を、校長をしながら建て直している。その建て直していく手法は大変魅力的で、覗かせてもらいながら、ああこうやって学校は創るんだと…。

うまく言えませんが、時永教育長さんが呼吸をしていたころの世羅教育、それが今いろんなところで成果を出しながら花開かせている。世羅の学校へ入ると、斎藤喜博さんや吉本均さんの言葉がパッと出てくることがあります。世羅西中学校の生徒会は県内でもちょっと傑出しているかなと思います。生徒会長が前に出て指導したらビシッと決まる。こんな高めあう学習集団を生み出せる風土があるというのが、世羅教育に対する私の感想です。

3. 洗礼を受けてリセットされた時代

渡邊 先ほど世羅西中学校の教頭さんに見送ってもらう時に、運動場の草取りの話をしたんですね。草を取るのとは心の貯金活動なんだ、自分が活動するグラウンドに感謝の意味を込めて草を取るという活動なんだとおっしゃっていて、さすが違うなあと思いました。いつの頃から始められたのかと思いましたけど。

時永 「世羅教育」もすごい洗礼を受けた時代がありました。中国新聞の教育欄に、「世羅台地にも非行の波」という見出しで学校の荒れの様子が載るぐらいでした。続いて高校の校長の自殺事件も起きました。

渡邊 いつ頃のことですか。

時永 平成6年～12年頃のことです。まさに世羅教育の影の部分というか世羅教育の歴史の闇の時代です。教育とは何か、学校とは何かが問われた時代でもありました。その渦の中にいるときは、本当にしんどい状態だったし、教師を続ける魅力を失いかける状態でした。

だからあの泥沼のしんどさから抜け出た今、二度とふたたび、あの時代のような状態に戻してはならないという思いは強く持っています。あの時代に世羅教育もリセットされたような気がします。そして再び立ち上がった時には、かつての世羅教育の精神性も生きていたと思いますね。世羅の教育風土は継承されたと思っています。その精神性はあの泥沼のようなしんどさを乗り越えたからこそ今はより強い教育理念として、ぶれないで前を向いて進んでい

けると考えれば、まさにあの時代は試練の時であったと振り返ることができます。

生徒指導面だけをみても、学校が荒れていた当時を体験している教職員は、今でも緊張感を持って丁寧な生徒指導や対応に当たっていますし、子どもの変化に素早く対応できる行動力と変化をキャッチできる精度のいいアンテナを持っていますね。若い教職員にその感覚はないわけで、そのノウハウは、体験的に学ぶことなく知識として受け取る内容となっていて、その継承がなかなか難しい面がありますね。

4. 大妻コタカの「愛教宗祖」「恥を知れ」

渡邊 先人のいろいろな力だと思いますが、明治期、大正期、戦前も含めて傑出した教育者がおられたのですか。

時永 これまでに話したような教育に熱心である土地柄（風土）はあったと思っていますが、世羅の教育をリードする特別に傑出した人の話は聞いていません。世羅の風土の中に精神性が引き継がれてきたような気がします。

世羅町教育委員会が入っているこの文化センターは、会議室や研修室やホールやさらには図書館もあり、多くの町民が活用されるわけですが、そのため残念なことに吸殻等をはじめゴミも落ちていることもあります。秋には落ち葉も舞います。そんな施設ですから委託業者の清掃業務だけでは日常の細やかな施設整備にはならないこともあります。したがって、教育委員会の一部の職員の中には勤務時間前の早朝に出勤し、室内の雑巾拭きは勿論、文化センター周辺の掃き掃除をして勤務についています。これは誰が命ずることもなく続いています。公共施設を気持ちよく使っていただくとする精神性だと思います。挨拶もそうです。このような行為（ホスピタリティ）を通して品格が備わっていくのかなと思っています。

渡邊 世羅の出身で大妻女子大学を創設された大妻コタカさんがおられると聞いて、地域性ということを考えていたのですが、私は先年、宮崎市のはずれにある穆佐（むくさ）小学校を訪ねました。ビタミンの父として世界的に有名な高木兼寛さんの母校です。高木さんは慈恵医大を創設されるんですが、高木さんが「地霊人傑」と書かれ色紙が飾ってありました。それを見て、乃木大将の漢詩「富嶽」の結句にある「地霊人傑はれ神州」という言葉からとられたのだととっさに思いました。そして、家に帰ってさらに調べてみると、乃木大将に漢詩の元になる言葉が水戸の藤田東湖の『弘道館記述義』の中に

あったんです。土地柄が最もすぐれており、そこに住む人もすぐれており、これが日本の神の国たる所以であるという意味ですが、土地には霊が宿る、精神性が高い土地の霊は強力なものがあり、そこからはずぐれた人傑が出てきているということ。世羅教育の基も世羅の土壤、土地柄にあるのかなと感じたのです。

余談になりますが、東京慈恵医大では、創立者の母校の児童を2～3人選んでもらって、東京慈恵医大に招待する活動をずっと続けていると聞きました。創設者の志を今も慈恵医大の教職員の方が継いでおられることに感心いたしました。

時永 甲山中学校の話ですが、現在の校長が3年前に着任しましたが、当時、学校生活の一部に荒れが見られる状態でした。そこへ赴任した校長が、郷土の先輩であり名誉町民でもある大妻コタカさんを学校の偉大な先輩として位置づけました。当時の学校は統合したため、大妻コタカさんにとって母校ということではないけれども、大妻コタカさんに所縁のある中学校であります。その学校に大妻コタカさんの書かれた石碑がありまして、これを学校の生徒指導の支柱としました。その碑は、「愛郷崇祖」という石碑です。世羅町では、町内7つの小・中学校が道徳の時間や総合的な学習の時間を使って「ふるさと学習」を行っています。その校長は、ふるさと学習の時間で大妻コタカさんのこの「愛郷崇祖」を子どもたちに絵解きをしていきました。また、町内に大妻コタカさんのもう一つの石碑「恥を知れ」があります。自分に厳しくあれと諭した大妻コタカさんの言葉です。この二つの言葉を生徒会活動の中核に据えたのです。

以後、甲山中学校では、「大妻コタカ先生の思いを受け継ぐ生徒会」をスローガンに生徒会活動や地域活動を行い、修学旅行では、東京都千代田区の大妻学院を訪問しています。そして、現在では中学生が中心になって小学生や地域の人も巻き込み、地域で行う「花いっぱい運動」や環境美化の取り組みとしての「クリーン大作戦」を行っています。中学生が、やらされ感で地域へ出て行くのではなく、自ら進んで地域に出る活動に変わりました。そうしたら地域が中学生を見る目がだんだん変わってきたんですね。

5. アクションリサーチ型の授業研究

継承と淘汰の話に戻りますが、現在ではアクションリサーチ型の授業研究を基本に各校が教育研究を進めています。これは、指導者である教師自身が現

状を省察する力や児童生徒の学びの姿、学力実態を分析的にとらえる力を身につけることによって、授業の質の向上を図るものです。

本町が進めているアクションリサーチ型の授業研究は、各教師の指導法を、授業を受ける児童生徒の実態に立って、授業の導入はどうか、子どもへの問いかけはどうか、机間指導はどうか、板書はどうか等々を省察し、結果としての学力はどうかを分析的に捉えていくこと、これを授業研究の出発点とすることです。それを基に改善案を建て実践をしていくわけです。改善案が仮説であり、実践が検証の場があります。

このような授業改善を図る授業研究こそが、現場実践者としての教育研究であろうと思います。これをOJTとして行っていくのが校内研修であります。最近では本町では、このアクションリサーチにシミュレーション授業を取り入れて、立てた仮説（改善案）を校内の教職員で事前にシミュレーションを行い検証する取り組みまで行っています。

これまで「世羅教育」が継承してきた授業研究は、己の指導のどこを変えて授業改善を図っていくかが基本で、その営みこそが世羅教育の理念であったと思っています。

アクションリサーチも「授業改善サイクル」であるわけで、私は現在、各学校に対して、教師一人当たり年間2回ぐらいはこのサイクルを回すようにアドバイスしています。現状を「リサーチ」して、そして改善点を「プランニング」し、授業で「実践」する。そしてそれを「チェック」にかけ新たな指導方法としていく。これを記号で表すと、『R → P → D → C』となるわけです。本町では、アクションリサーチ型の授業研究を、『R → P → D → C』の授業改善サイクルとしてイメージしています。管理職もですが、教務主任や研究主任のいわゆる熟練教師には、一人一人の教師がこの授業改善サイクルを回すことができるように指導・助言するよう求めています。その取り組みの中で、教育の質が向上すると思っています。

教育の質を高める学校づくりとして大事にしていることがもう一つあります。それは、各校に特色ある学校文化を育てることです。その主たる活動は、各校にその地域の歴史・文化に裏付けられた児童・生徒活動を育てること、それを毎年11月1日の「せら教育の日」に行う「学校文化発表会」で発表することです。校長は経営者として、自校の学校文化を育て、それを発表会・交流会で子どもたちの姿で表現させる使命があります。学校文化はその学校の教

師文化かもしれませんね。

渡邊 世羅町においては、校内研修は盛んなわけですね。

時永 盛んであると思っています。基本的には授業研究を中心に校内研修をしています。

渡邊 今日の世羅小学校での1年生・2年生の歌声はよかったですね。声を張り上げてとか、口をいっぱい開けてとか、大きな声でというのはいいですね。あそこから何かが出てきそうな感じがします。

時永 斎藤喜博の合唱指導の基本はそこだと思います。でも斎藤喜博に代表される合唱表現を良しとしない人には、声を張り上げるだけの歌声になっていると批判されたこともありました。そういう歌声は、高学年になるにつれて声を出さなくなる。また、コーラスとしての美しい歌い方でないというのですね。

でも、子どもたちがリズムにのって一生懸命歌う姿はいいものですね。

渡邊 いいですね。玄関にも表示がありましたが、本当に一生懸命ですね。

6. 地霊を探し精神性を高める

岡本 今日は世羅小学校、面白かったですね。世羅中学校への可能性をつくりながら繋がっていくわけですから。

渡邊 世羅西中学校は、生徒会が中心になって活動し、その後ろで、先生方がうまくお膳立てをしてやっておられるんだと思いますね。先ほどビデオで見せていただいて感動した「明神の舞」、機会があったら実物を見せてください。

岡本 来年の教育の日、やっぱり11月1日ですか。

時永 はい、あの日を教育の日と決めていますから、何曜日になろうとも11月1日です。

岡本 地霊とか、崇祖とかという言葉がぴったりですね。「明神の舞」は、まさにオラが土地の地霊であるし、崇祖なんですよ。

時永 世羅西地域の人にとっては、自分たちの誇りにもなっていますね。ややもすると周辺地域という意識すらある中で、地元の中学生在がこのようなことをしてくれるというのは、今、地域自慢になっていますね。

岡本 ここへすべての校長が戻れるような哲学を持つといいですね。自分が任せられた土地のまさに地霊を探し、崇祖を見つけて、子どもらの精神性を高めるという…。これはなかなかすごいな。やっぱり世羅文化というか、きっと大田庄の時代ぐらいから累々とながっているのですよね。

（注：大化の改新の際、この地域の「郷」などを集めて世羅郡が設けられ、その後の平安時代には荘園が起り、備後の中央に位置する「大田庄（おおたのしょう）」として統治され、源平のころ、平清盛の子重衡が領主となり、絶大な権力をもつ後白河法皇に寄進して栄えた。平家滅亡後、法皇は紀州高野山に寄進したため、この地域は、今も残る「今高野山龍華寺」を中心に繁栄した。）

渡邊 それはあるんでしょうね。今朝、今高野山から降りてきて、そんな感じがしますね。やっぱりこれは何かあるんですね。町を走っていても、全体的に豊かですね。

7. 新しい世羅町教育プラン策定へ

岡本 この教育長さんがいる間に、もう一度生まれさせてもらわんと…。

渡邊 時永教育長は「世羅教育中興の祖」…。

岡本 力はないですけど、私も横から応援団をさせてもらっています。

時永 岡本エルダーは、私にとって腹心の友でありお師匠さんでもあります。

今年、世羅町が合併して10周年を迎えています。これまでの10年間を振り返り、合併以来10年間続けてきた「世羅町教育プラン」を見直し、これからの10年間を見通した新しい教育プランを立てようとしています。そのために、教育委員さん方にも事務局案を検討するだけの考え方ではなく、教育委員一人一人が原案を提案してもらうよう依頼しています。

渡邊 それが書けないような教育委員はいらないということですね。

時永 今、教育委員の質の向上が求められています。それは、制度を変えるだけでできるという話ではありませんね。

渡邊 本日は貴重なお話をありがとうございました。

Succession and Selection of “SERA Education”

Kikuro Watanabe

(Naragakuen University / Japan Educational Press)

Masunori Tobkinaga

(Sera-cho Board of Education)

Kazunobu Okamoto

(Eastern Education Office of Hiroshima)